

遊ぶがごとく学ぶ国語の授業

—教材（や作者）との「対話」を通して—

戸塚 拓也 高度教職開発コース

キーワード：対話的活動，古典，文学的な文章，変容

1. はじめに

幼少期の子どもは、日常の遊びの中に学びが存在している。つまり、遊びと学びが直結している。しかし、子どもにとって、遊びと学びはいつの間にか切り離され、直結しないものになっていく。私が目の前にする中学生は、まさにそういう段階にいるのかもしれない。そのような彼らと遊びと学びが直結した授業を展開することはできないだろうか。このような思いから、テーマを「遊ぶがごとく学ぶ国語の授業」と設定した。なお、ここでは「遊ぶ」と「学ぶ」を次のように定義する。「遊ぶ」は、対象に対して没頭中で生じる体や心の動きを指す。それに対して「学ぶ」は、文章という対象に没頭中で生じる感動や有用感を指す。つまり、そこに教科としての学びが伴うこと、これを「遊ぶがごとく学ぶ」とする。

では、「遊ぶがごとく学ぶ国語」の授業を目指す上で、必要なことは何だろうか。私は、それを「対話的活動」（以下「対話」とする）と置きたい。この「対話」について田近（2017）は、「対話」は、異質な他者との共生の関係の中に成立すると述べている。この田近が述べる「対話」を国語に当てはめた時、次の四つの要素が挙げられるのではないか。

- ・対象となる文章（あるいは書き手）に表れるものの見方や考え方と出会うこと
- ・文章（あるいは書き手）だけでなく、友や教師のものの見方や考え方と出会うこと
- ・上記二点との出会いを通して、自己がもつものの見方や考え方を更新すること
- ・ものの見方や考え方を読み手に的確に伝えるために、書き手が文章に施した工夫に出会う、つまり文章そのものと出会うこと

私はここに文章という対象に没頭中で生じる感動や有用感があると考え。そこで、教材や作者との「対話」がある授業改善に焦点をあてて研究を進めたい。以上のことから、副題を「教材（や作者）との『対話』を通して」とした。

2. 「おくのほそ道」の事例から考える

2.1 一年目の事例（平成29年10月26日3年生）から

(1) 実際の様子

教師は、平泉の段が最初の句「夏草や兵どもが夢の跡」で終わるのではなく、「五月雨の降り残してや光堂」まで芭蕉が描いた理由を考えるために、二句を比較する活動を位置付けた。そこでI生は、芭蕉の思いが暗から明へと変容していることに気づき、それが芭

蕉に二句目まで描かせる理由になつたと考えた。そこで教師は、「最初の悲しみの句だけでなく、喜びを示す二句目を詠み足した芭蕉に、あなたは共感するか否か」と投げ掛けた。I 生は、この投げ掛けに対し、暗から明への差がついていることに共感した。

(2) 事例の振り返りとチーム演習での指摘から

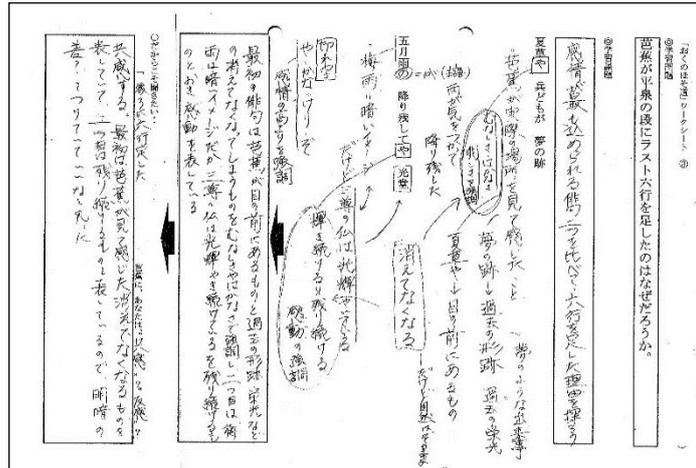


図1 I 生のワークシート

本事例における振り返りを私は次のように行った。

- ・ 卒業を前にした生徒に対し、平泉の段における芭蕉のものの見方や考え方の是非をぶつけることで「対話」が生まれるだろうという私の思いが先行してしまった。それ故に、I 生や周りの生徒からそのような問いが生まれるのを待つことができなかった。
- また、本事例をチーム演習で話した際に、鎌倉先生から次のような指摘をいただいた。
- ・ 生徒が自ら遊んでいるのか、あるいは教師が生徒を遊ばせているのか

これらのことから、他者がもつものの見方や考え方と出会うという第一の要素に生徒が向かう過程における教師のかかわりに課題を感じた。もっと腰を据えて待ったり共に歩んだりする教師であることを目指し、同じ場面で二年目も授業を行った。

2.2 二年目の事例（平成 30 年 11 月 8 日 3 年生）から

(1) 実際の様子

教師は、芭蕉が平泉で涙を流した真意を考えるために、切れ字「や」を芭蕉がそこに使った意図に着目して二句を比較する活動を位置付けた。そして、次のような全体追究を行った。

- Y 生 1：まず「夏草」の句ですが、僕は藤原氏を包み込んでいるものの象徴として「夏草」を芭蕉は使ったと思います。ただの土ではなく、そこに草が生えていることで、土となった当時の人々が守られている気がします。芭蕉もそういった部分に感動し、涙を流したと思います。
- W 生 2：僕は Y くんとは反対の考え方です。空しさの象徴が「夏草」だと考えます。兵たちの姿はもうそこにはない、まるで夢のよう、ここに空しさを感じました。
- H 生 3：僕は「五月雨」の句でいきます。先生はさっき「五月雨」は梅雨の長雨だと言っていましたよね。僕はそれを聞きながら、梅雨の雨をイメージしてみました。そうしたら、梅雨の雨は柔らかくて光って見えるようなイメージがあって、「光堂」の「光」とも重なる気がしました。
- B 生 4：僕は違うイメージをもちました。長く降るから「長雨」ですよね。その場を滅ぼしていくものの象徴として使っている気がします。人を壊していくはずの

- 「長雨」だけど、「光堂」だけは残したからここに「や」がある気がします。
- 戸塚 5 : 「五月雨」一つでこんなにイメージが違いますね。他の人はどう思いますか？
- I 生 6 : 私は、Hくん派です。「しとしと」と降る柔らかい雨というイメージがあるからです。柔らかさの中に粒の輝きも梅雨の時ならあってもいいかなと思います。
- M生 7 : かたつむりの上に降ってもいい感じみたいな雨ですよ。
- 戸塚 8 : イメージしやすいですね。続いてどうですか？
- B生 9 : 分かる気はしますが、そこにあるものを長い時間をかけて滅ぼしていくのが雨であるのに、「長雨」は「光堂」を降り残したと芭蕉は詠んでいませんか。
- A生 10 : そうですね。さらに言えば、雨が降り残したのもあるし、お堂を残そうとした人の関わりもそこにありますよね。そういったところに感動しているから、「五月雨や」ではなく、「降り残してや」と芭蕉はしたのだと思います。
- N生 11 : 「光堂」は、藤原氏や義経の象徴です。それだけでなく、それを知っていて、こうやって「光堂」を建てようとした人たちや、それが壊れるのを防ごうとした人たちがいます。色々な人の思いがそこに集まるから、「光堂」なのです。
- O生 12 : たくさんの方が関わってつなげてきた思いが、この「光堂」を残すものにしたということですね。芭蕉はそこに感動したのでだと思います。
- Y生 13 : 今話を聞いていて、栄枯盛衰が浮かんできました。
- 戸塚 14 : どういう意味ですか？
- Y生 15 : 人々によって守られてきたものが「光堂」で、それは「千歳の記念」と言うくらい恒久的なものとなったという感動があると思います。でも、それが映えるのは前に「夏草」があるからだだと思います。人のはかなさを目の当たりにしたからこそ、残っていくことへの感動が強くなったのだと思います。

以上のような全体追究を行った後、生徒は自分の考えをまとめた。下のワークシートは、全体追究の中で1回も発言をしなかったT生のものである。T生は、自身のまとめの最初の言葉として「そもそも」という言葉を選んだ。そして、切れ字である「や」は、詠嘆や問い掛けの意があることを指摘している。そして、「夏草や兵どもが夢の跡」の「や」は、夏草に対して、ここに生きた人々がいたのかという問い掛けや人のはかなさを知った空しさ、人のはかなさこそ運命であることを知ったことへの感動、この三つがあるとまとめた。一方で、「五月雨の降り残してや光堂」の「や」は、藤原氏や義経主従の者が滅んで

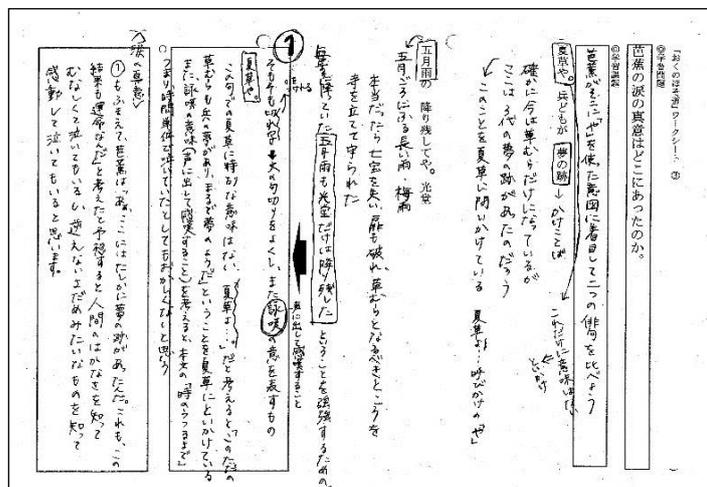


図2 T生のワークシート①

から毎年のように降っていた五月雨が、光堂だけ降り残したことを強調するものだと考えた。以上のことから、T生は全体追究の中で発言こそしなかったものの、友の発言を基に思考を続けていたことが伺える。

T生は、次時において単元のまとめをした。T生はそのまとめの中で、平泉における芭蕉の思いに深い共感の意を示した。また、そのような思いを十七音という俳句で表現した芭蕉への感動も示した。さらには、単語一つ一つに込められた思いを読み、作者に共感していくことに古典を学ぶ面白さや楽しさがあると指摘した。

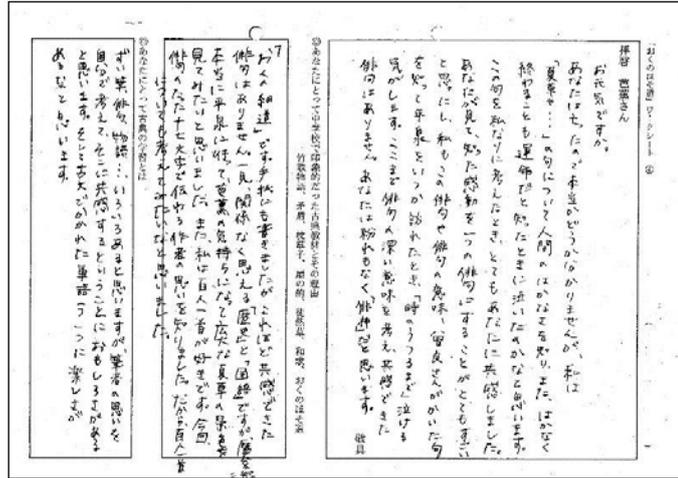


図3 T生のワークシート②

(2) 事例を振り返って

平泉の段における芭蕉のもの見方や考え方に会うという第一の要素を丁寧に取り組むことを心掛けて二年目の実践を行った。また、そこに迫るために、切れ字「や」の位置の変化に着目した学習を行った。この二つが、生徒の思考を大きく変えることとなった。そして、このT生の姿から、先に挙げた国語における「対話」の四つの要素を見ることができた。また、「遊ぶがごとく国語を学ぶ」生徒の姿の一例を見ることができたと考える。

3. 見えてきたことと今後の課題

本抄録では古典教材「おくのほそ道」の事例を挙げたが、教職大学院に在籍した二年間の中で1学年の文学的文章「花曇りの向こう」や「少年の日の思い出」、3学年の古典教材「論語」を扱った実践も行った。それらの事例から、国語における「対話」の要素である四つを生むために、次の二つのことが必要であることが見えてきた。

- ・教材を確かに読んでいく中で、生徒の中に生じる共感や違和感を教師が適確にとらえていくこと
 - ・切れ字「や」に込められた芭蕉の意図に着目して二句を比較したT生のように、教材を確かに読むための学習活動の必要性
- 以上のことを踏まえながら「対話」がある授業を展開していくことで、「遊ぶがごとく学ぶ国語の授業」が実現されていくのではないかと考える。次に、さらに研鑽を積みたいことを挙げる。
- ・T生が最後に示した深い共感を授業中に取り上げ、生徒の思考をさらに広げ深めること
 - ・説明的文章における遊ぶがごとく学ぶ国語の授業改善
 - ・遊ぶがごとく学ぶ国語の単元を発展的・系統的に組んでいくこと
 - ・評価の在り方

参 考 文 献

田近洵一 (2017) 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善—第九次教育課程改訂を受けて、国語教育の可能性を探る— (国語の授業で「主体的・対話的で深い学び」をどう実現するか—新学習指導要領 2017 の改訂を読み解く, 「読み」の授業研究会編, 学文社, pp.134-141)